

三重県指定伝統工芸品

取材・文…中村真由美 中村元美 堀口裕世
撮影……梅川紀彦 尾之内孝昭 中村元美
ただし※印の写真は取材先から提供していただきました



江戸時代後期に深野和紙を用いて出された紀州藩の「松坂銀札」(復刻)。
松坂の豪商らが請け負って銀銭などと交換されました。

自然の素材と職人の技が作り出す暮らしの道具——。
今では伝統工芸品、民芸品などと呼ばれるようになったこれらの品は、昔は人の暮らしに欠かせないものでした。世の中の変化に追われるように、見かけることが少なくなりましたが、温かみのある、用の美に満ち、使い勝手にも優れています。

それぞれの工芸品がその地で作られたのには、風土や暮らしとの深い関わりがありました。長い年月の中で技が研かれ、その土地の気候や文化にしっかりと合う道具が作られていったのです。

三重県には、豊かな自然と文化や歴史の中で育まれた伝統工芸品が、今もたくさん息づいています。伝統を担う人たちが、その地で代々受け継いできた製法で、心を込めて作られているのです。
今回は、三重県指定工芸品の中から6つの品をご紹介します。大切に、けれどしっかりと使い込んで、長いおつきあいをしたくなる道具たちです。

●各施設の営業日時・料金・予約方法などは、それぞれ異なりますので、事前に必ずご確認ください。

◆三重県指定伝統工芸品

名称	地域
桑名盆(かぶら盆)	桑名市
桑名刃物	桑名市
桑名萬古焼	桑名市
桑名鋳物	桑名市
多度の弾き猿	桑名市
和太鼓	いなべ市、桑名市
地張り提灯	いなべ市
日永うちわ	四日市市
四日市の提灯	四日市市
関の桶	亀山市
高田仏壇	津市
阿漕焼	津市
伊勢木綿	津市
なすび団扇	津市
竹細工	津市
深野紙	松阪市
松阪萬古焼	松阪市
松阪の猿はじき	松阪市
松阪木綿	明和町、松阪市
伊勢の神殿	伊勢市
伊勢の提灯	伊勢市
伊勢玩具	伊勢市
伊勢の根付	伊勢市、志摩市、津市、明和町、玉城町
伊勢春慶	伊勢市
伊勢紙	伊勢市
伊勢一刀彫	伊勢市
和釘	伊勢市
擬革紙	玉城町、明和町
火縄	名張市
尾鷲わっぱ	尾鷲市
那智黒石	熊野市
熊野花火	熊野市
市木木綿	御浜町

資料提供：三重県 雇用経済部 三重県営業本部担当課
伝統産業・地域資源活用班

関の桶

【亀山市関町】



カンナでガワを削る服部 健さん

東海道47番目の宿場町・関宿には、道行く人が足を止めて、窓越しに内部をのぞく店があります。明治15（1882）年創業の「桶重」です。店内に入ると、最初に目に付いたのが花手桶。飴色の木肌と大輪の赤いボタンが調和し、とても

風情があります。「その桶はサワラで、30年物だね」と教えてくれるのは、4代目の服部健さんです。桶の主な材料には、サワラ・コウヤマキ・スギなどがありますが、花手桶に使用するのにはサワラが多いとのこと。加工しやすい上に、水に



花手桶にいけられたボタン



服部 健さん

強くて匂いが少ないのが特徴です。そのため、イセビツ（置き蓋の飯櫃）や、ハンギリ（底の浅い盥状の桶）などにも使用されます。実際にサワラの木片に鼻を近づけると、ヒノキほどの強さはなく、ほのかに優しい香りがしました。また、耐久性に優れているコウヤマキは風呂桶などに、スギは味噌桶や漬物桶などに使用されます。

「関の桶」は50年経っても壊れないと評され、全国各地から注文が舞い込む服部さんには、職人としての信念があります。

す。中でも特にこだわっているのが、材料の厳選。たとえばサワラは、年輪の詰まった上質なものの、タガ（桶の外側を堅く締め固める輪）に使用する竹は5年物の真竹で、11月ごろに伐採したものという具合で、必ず自分の目で見極めるといいます。また、使用した道具は毎回手入れするというのも、職人ならではといえるでしょう。壁一面に並ぶカンナやセン（両手で使う削り道具）などは一見の価値がありますが、「一番古い道具は」と尋ねると、小さな板を見せてくれました。カタと呼ばれるもので、アーチ状に削ったガワ（側面の板）に当てる、曲がり具合を図る定規の役割をします。「明治」と記されていることから、初代の重蔵が作製したものだと推測されます。以来今日に至るまで、大切に受け継がれているのです。

型の桶や、直径2メートルを超える大型の桶も制作。また、部材がバラバラの100年物の桶を修理したこともあるといいます。「愛着があったみたいで、とても喜んでくれたね」と話す表情は、とても穏やかで、人柄が伝わります。

この和やかな笑顔の服部さんが、表情を一変させたのは、作業風景を見せてくれた時のこと。花手桶作りには30以上の工程があり、材料の切り出し、アーチ状に削ったガワの組み立てや削り、底板入れなどの工程を経て、下準備したタガをはめ込んで仕上げに入ります。

この日は、ガワを削る工程などを見せてもらいました。静寂の中、カンナを持つ服部さんの手がリズムミカルに動くたびに、おがくずがこぼれ落ち、芳香を放ちます。一連の動作は、まるで服部さん自身が精巧な道具のようにも見えました。

関宿では、今日もまた、桶作りに真摯に取り組む職人の姿が見られることでしょう。

お問い合わせ

「桶重」

TEL 0595-96-2808



「桶重」外観



カタ（上段右側）やカンナ（中段右側）などの道具類が整然と並ぶ。



リズムミカルに動く服部さんの手

「どんな桶でも作るし、どんな桶でも修理するよ」と服部さん。その言葉通り、全国から寄せられる注文には必ず応え、これまでに神社の神事で使用する卵

伝統を守り新風をおこす

日永うちわ

【四日市市日永】



「貼り」の工程を行う稲垣 和美さん



伊勢型紙を使用した「日永うちわ」

ミント、ゼラニウムなどのアロマオイルを染み込ませることができたのです。こうして扇ぐたびにアロマの香りに癒される革新的な団扇が誕生しました。

「日永うちわ」制作には20以上の工程がありますが、この日は、お二人に「貼り」と「断裁」の工程を見せてもらうことに。刷毛で骨全体に糊を塗り、和紙を貼り付ける和英さんの一連の動作はスムーズで、手際の良さに見とれてしまいました。傍らでは、嘉英さんが鎌と木槌を使って、余分な骨を断裁する際のコンコンという音が響きます。

伝統を守りながらも新たな風を起こす二人の挑戦は、5代目へと受け継がれていくことでしょう。

お問い合わせ

「株式会社稲藤」(水曜日定休)

TEL 0598-3345-1710

「日永うちわ」は、天保4(1833)年に成立した「勢陽五鈴遺響」の日永の項に「名産」と記されたほど、全国に知られた存在でした。東海道と伊勢街道の追分として賑った日永には、多くの店が軒を連ねていましたが、現在は「株式会社稲藤」1軒となり、4代目で取締役会長の稲垣 嘉英さんと、奥様で常務取締役の和英さんが伝統を守り続けています。

「まちかど博物館」として公開し、状況に応じて手作り体験も受け付けている

棚田と和牛の里の礎となった紙作り

深野紙

【松阪市飯南町】



冷たい水で紙を漉く※



どっしりとした和紙の束

かし、明治に入ると、機械化や洋紙の台頭に圧され、深野の漉屋は次々と廃業に至りました。

「最後の2軒が廃業したのが昭和44(1969)年

美しい棚田と松阪牛発祥の地として知られる飯南町深野。この地で紙漉が行われるようになったのは、安土桃山時代の末ごろ。冷たくて鉄分の少ない清流に恵まれているなど、紙漉に適した環境であることを知った郷士の野呂 市兵衛が、美濃から職人を招いたことに始まります。江戸時代には250を超える家々が紙に携わり、紀州藩の「松坂銀札」や松坂商人たちの帳簿、神宮のお札などさまざまな紙が漉かれていました。し

年でした。昭和58(1983)年に町史の編纂に付随して、父と私が紙漉を再現したのをきっかけに、4年後、「深野和紙保存会」が結成されました」と語るのは、同会の会長を務める野呂修三さん。「江戸時代には、『深野に行けば仕事がある』と各地から人が集まりました。紙漉は冬の作業ですから、夏は米を作るため、たくさんの



野呂 修三さん

棚田が開墾されたのです。また、和紙の需要が激減した昭和30年代、紙の原料を煮ていた釜でわらや麦を煮て牛に与えたため肉質が上がり、深野の牛の評価が高まりました。棚田も和牛も、その基盤となったのは紙漉だったのです。

原料となる木を刈り取り、皮をむき、煮て水にさらし、石臼などで撞いて、水を張った舟で漉き……。寒い季節に水を使う紙漉は、体力も技術も精神力も要する厳しい仕事ですが、「紙漉の技や喜びを次世代に伝えたい」と野呂さん。現在「松阪市飯南和紙和牛センター」を拠点に17名が伝統の技を守り、地元の学校の卒業証書を生徒自身が漉くなどの活動が続いており、今秋開催予定の「三重とこわか国体」でも女子総合成績表彰状(第1位(皇后杯)から第8位)として使用されます。冬季には紙漉体験もできるそうです(要予約)。

お問い合わせ

松阪市飯南地域振興局

TEL 0598-332-2511

※印の写真は取材先から提供していただきました



稲垣 嘉英さん(右側)と和英さん

伊勢の提灯

【伊勢市船江】



木型に巻いた竹ひごに、糸をかけて固定。提灯の強度も増す。

嘉永5(1852)年創業の「岩田提灯店」は伊勢神宮御用達。照明器具として生産された提灯は、祭礼場面や装飾での用途も多く、「伊勢の提灯」はおもに遷宮行事のときに大量に作られていました。

5代目となる岩田茂男さんは昭和16(1941)年生まれ。「うちの親父は三男でセールスを担当していましたが、長男が工場長、次男が絵や字を描いて、その時代は分業だね」。工場が戦災を受け



祭りの出番を待つ提灯。

てからは岩田さんの父親が跡を継ぎ、岩田さんは22歳でこの仕事に就きました。



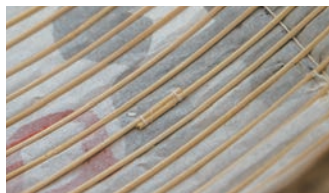
岩田 茂男さん

戦後の伊勢市内には同業が十数軒もありましたが、現在は「岩田提灯店」のみ。県内でも少なくなり、津から尾鷲までと遠方からも注文が入ります。

提灯の材料は竹ひごに和紙、それに上下の留め具となる口輪にヒノキが使われています。形は丸型、棗型、長型、盆用提灯など、形と大きさの組み合わせで200ほどの種類を手掛け、繰り返し使う型は大切に保管しています。「値段表もありますが、数が多くてなかなか覚



折り畳む部分をヘラで押す。
写真提供：伊勢文化舎



竹ひごの継ぎ目が短く、丁寧。



家紋の伊勢型紙は300種ほど



「神都博覧会」の提灯作り※

えられません。丸と棗が基本で、ほとんど使わないひょうたん型とこともあります。特色のある提灯は文献などを調べながら作っています。まずはそれぞれの形に合わせて、木型を設計します。その木型に沿って竹ひごを螺旋状に巻いて形を作り、今度は竹ひごを繋ぐように縦に糸を巻きつけて、しっかりと固定します。そして竹ひごに刷毛で糊を伸ばし、美濃和紙を一枚ずつ貼り合わせます。乾いてから折り畳む部分をヘラで1か所ずつ押して印をつけ、油を塗って仕上げます。これらの作業はかつては分担していましたが、今は富子夫人と二人で全工程を担っています。

提灯の文字や紋様はすべて岩田さんによるものです。楷書や行書、隸書、勸亭流など、いろんな書体や絵柄を描き分け、さまざまな注文に応じてきました。「字が大事やもんで、戻ってから習いに行きましたよ。すぐ使い物になるわけじゃなく、趣味と違いますで必死でしたね」と、独学で学んだ書体もあるようです。また昔は各家に家紋入りの提灯を備え、初節句や客の見送りなど何かにつけて提灯の出番がありました。家紋には複雑な図柄もあり、岩田さんが自作する型紙の種類も増えてきました。「注文が多くなるのは遷宮のときです。御木曳やおとしもち、御白石持で各団それぞれに提灯があり、

大きい団は奉曳する車も大きい。そうなるど飾る提灯が2段になったりね」。工房にあったセピア色のアルバムを見せてもらいました。提灯が多彩に町を飾っていた昭和の輝きを知る貴重な資料です。昭和5(1930)年の「神都博覧会」には数千個の注文に対応し、従業員も30人ほどいたようです。選挙事務所前にも提灯が飾られています。「規程のサイズは直径45センチ、長さ85センチだったのですが、それだと不格好ですもんで、少し小さく作っていましたね」と、岩田さんのこだわりが感じられます。

提灯は日本人の暮らしになくてはならないものでした。飲食店の看板になる赤い提灯には情緒が漂います。「使うところも減ってきてますけどね、雰囲気がいいでしょ」と、にこやかに語る岩田さん。温かみのある提灯は、伝統的な日本建築によく似合います。

お問い合わせ

「岩田提灯店」

TEL 0596-128-3041

優しい肌触りと先人の努力を日用の品々に託して

市木木綿

【御浜町下市木】



経糸と緯糸の組み合わせにより柄は幾通りにも。

七里御浜沿いののどかな集落にある工場で、ベルト式のモーターによって動く織りが、カッシャン、カッシャンと音を響かせます。これは経糸に緯糸を打ち込む箴が左右に飛ぶ音。リズムミカルな織音を鳴らし続け、懐かしい手触り

の「市木木綿」が生み出されています。今では唯一の織元となった向井浩高さんが、自動織機に不具合がないかを見て回ります。100年の時を経た機械の部品は手に入りにくく、修理も自身の手で。要のベルトが軋み出すと微妙な



向井 浩高さん

調節を施します。「調子よく動いてくれるといいのですが、機械を直して1日つぶれることもあります」と向井さん。機械といえども織る速度は手織りの4倍程度。そのため手作業に近い柔らかな風合いが残り、丈夫で通気性のよい木綿ができあがります。

向井さんは熊野市木本町にある「向井ふとん店」の3代目。店舗には「市木木綿」の布団をはじめ、名刺入れやブックカバー、ペットボトルホルダーなど、使い勝手のよいアイテムが並んでいます。赤や青、黄色とカラフルな縞柄も特徴で、うたた寝用の小ぶりの布団は、粋な模様がフローリングの家にもぴったりです。

七里御浜沿いののどかな集落にある工場で、ベルト式のモーターによって動く織りが、カッシャン、カッシャンと音を響かせます。これは経糸に緯糸を打ち込む箴が左右に飛ぶ音。リズムミカルな織音を鳴らし続け、懐かしい手触り

なければならぬと、染めを引き受けてくれる工房をようやく京都で見付けました。

みかん畑が広がる御浜町で、海岸近くに山が迫る市木地区は、昔から高潮の被害に悩まされ、田畑の耕作に向かない寒村そのものでした。明治時代中頃に、村人たちに仕事を与えたいと大久保万太郎という人物が大和地方から機械織りの技術を取り入れ、藍の栽培を始めます。村の生き残りをかけ、何度も実験を重ねて、ご当地木綿が誕生しました。

後古い機械を購入して数軒が再開するも、高度経済成長などの影響で木綿の需要が減少します。大正時代に36軒あった工場は、昭和末期にはたったの2軒。そのうちの1軒が大畑織物工場でした。「天気によって箴の滑り具合は違うし、勘みたいなのがあります」と気温や湿度に気を配みながら、向井さんが織りはじめて十数年が経ちました。「市木木綿」は、撚りをかけない単糸を使うため、「かせ」と呼ぶ輪にした状態で糸を染めますが、手間の掛かる「かせ染め」をする

所が全国的に少なく、染色を頼んでいた工場が廃業となって焦ったこともあり、肌がなじむ「市木木綿」は単糸です。

お問い合わせ

「向井ふとん店」(日・月曜日定休)
TEL 0597-18512432



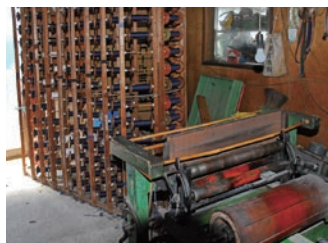
洒落た縞模様の枕や座布団



かつて行商に使われていた行李



経糸、緯糸のボビンに巻く機械



柄に合わせて経糸のボビンを並べる。



鮮やかな色使いがアクセント

火縄

【名張市上小波田】
かみおばた



削った真竹の皮を、一定の太さでより合わせる。

時代劇には戦のための武器がさまざまなに登場しますが、中でも戦国時代を描いたものに火縄銃を目にすることがあります。銃を発砲するため、火薬に引火させる道具が火縄です。一定の時間継続して火を安全に携帯し、江戸期までは

その用途として、明治以降は寺社の行事や花火用として需要がありました。映画やテレビの撮影で、火縄銃を空砲で発射することがありますが、そういった舞台演出としての使い道も存在し、NHKの大河ドラマ「麒麟がくる」では、

主人公・明智光秀が魅了された火縄銃に、名張市の「上小波田火縄保存会」の「火縄」が使われました。田園風景の広がる上小波田地区では、寛文11（1671）年から「火縄」作りが始まりました。江戸時代、集中豪雨により池が決壊した上小波田に、伊賀国を治める藤堂藩が「火縄」を作って収入を得るよう奨励したと文献に記されているのです。そうやって藤堂藩の保護下で生産され、水路を防御する鉄砲隊のために100丁分の「火縄」が発注されたことも伝わっています。

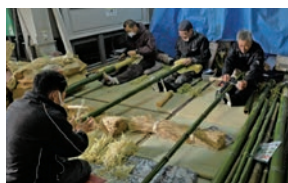


京都の八坂神社へ奉納。保存会は2018年に結成された。※



たこともあり、
参拝者は灯籠
の火を「火縄」
に移して持ち
帰り、正月の
煮炊き物の種火にし、残った縄は台所に
飾って火伏せのお守りにしているよう
です」と同会会長の岩寄義孝さん。

火縄は木綿から作るものが多いのですが、上小波田では薄く削った真竹から作られていて、10センチで1時間も火持ちするほど品質が高いもの。竹製の火縄には油分が含まれていて、水をかけない限り火が消えることはありません。明治初期には、農閑期の副業として地区のほとんどの農家が「火縄」作りに従事していたそうですが、後継者不足で半減し、平成28（2016）年には、最後の職人と言われた岩寄さんの親類一人だけとなってしまいました。復活の転機になったのが、その年に行われた「隠街道市」。名張市からの依頼で「火縄」作りを実演すると、その技術に来場者から大



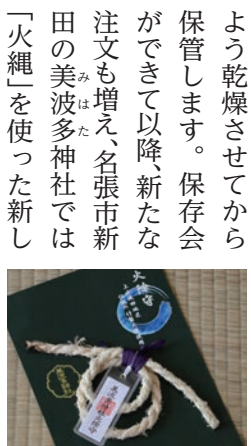
熟練の技術で竹を削る。
写真提供：名張市



使い込まれた道具類



燃焼時間の長い真竹の火縄



美波多神社の「火除守」

よう乾燥させてから保管します。保存会ができて以降、新たな注文も増え、名張市新田の美波多神社では「火縄」を使った新しいお守りの頒布も始まりました。寒い時期に行う火縄作りは根気のいる作業です。「後継者不足の問題はありますが、地域の伝統産業をどうにか継承していきたい」と、道具のナタを手入れする岩寄さん。歴史と技術を次の世代に受け継いでいます。

お問い合わせ
「上小波田火縄保存会」
TEL 0595-65-3132